新しい風

たちまちやってみよう！

たちまちメンバー	LIGHTHOUSE設計	篠﨑竜大・千恵美
	みなとやゲストハウス	大川漁志・香菜
	PIZZERIA Potto	平山健人・みずき

長崎県の壱岐島、その東の玄関口、芦辺港近くの小さなまち芦辺浦。
このまちで生まれ育った人間と外からやってきた人間が、日々を楽しくするために活動中。
www.tachimachi.net

人と人の交差点のような場をつくる

芦辺浦をふらっと人がたち寄るまちに、人と人の交差点のような場にしたい。

色々な人が混ざり合い、外からの人を迎えるまちにしたい。

そんな想いで、昨年から「たちまち」動き始めました。

なぜこの活動を始めたかというと、３年前このまちに「みなとやゲストハウス」ができて、少しずつあまり見かけない人がまちに滞在するようになりました。そのみなとやゲストハウスから「このまちにもっと人が寄るように食堂をつくりたい」と相談があり、色々と検討していくうちに、今のまちの状況では１つの店や会社が少し抜け出したとしても、それで完結してしまうのではないか、広がりに欠けるのではないか、といったことを考えるようになりました。この問題は個々のみでは解決できない、また個別に発信していくだけでなく、集まって発信していくことが力になっていく、という思いから、自然とこのまちを巻き込んでまちごと価値が上がっていくことに

可能性を感じるようになりました。

LIGHTHOUSE設計・みなとやゲストハウス・PIZZERIA Potto それぞれ夫婦でこのまちに住み、事業をし、また子育てをしている３組６人でたちまちは始動しました。

一時的なイベントや指針、目先の利益などではなく、まちの新しい日常をつくっていくこと、そしてこのまちを好きになってくれる人がじわじわと増えていくことを目指して。

たちまちの意味は広辞苑によると「非常に短い時間に行われる様」「すぐ」「即刻」。壱岐では「とりあえず」という意味でもつかわれます。このたちまちという名前はそのままこの活動の理念で「たちまち考えてみよう」「たちまち動いてみよう」「未来をたちまち信じてみよう」といったこと、うまくいくかどうかは分からないけど、たちまちやってみよう！という考えからきています。この力の抜けた感じが自分たちにはちょうど良いかなと思っています。

混ざり合う場としての拠点づくり

芦辺浦の人口は、他のまちと同様に減り続けています。いつの間にか人が減り、店が減り、空き家が増えていきました。芦辺小学校の生徒数もこの50年で300人以上減少し、今では50人に満たない人数になっています。今から50年後まちが、先人が脈々とつないできた様々なものが消えている可能性を誰も否定できない状況です。

このまちの強みは学校、庁舎、郵便局、フェリーターミナルなどの社会資源があること、下水道が整備されていること、住宅地から徒歩５分で清石浜という美しいビーチがあることです。そして、子どもたちがこのまちを遊び場とし、それを見守る目があること、安全な環境があることだと思いました。

徒歩５分のビーチ　清石浜

まちの中に子どもたちの日常的な居場所をつくること。子どもたちが主体的に寄って、遊び、学ぶ。それがきっかけとなり親や地域の人が寄り、年齢や立場の異なる人と直接コミュニケーションをとり、関係性を築いていくこと。特別なイベントではなく、子どもたちの日常に当たり前にあること。学校や家でトラブルがあってもいつでも立ち寄れる場所となること。そんな場所を目指して、芦辺浦の海沿いの空き家を買取り、わたしたちと子どもたちで改修し居場所をつくりました。今はまだ中には何もなく、月曜日と金曜日の午後３時30分から５時まで開けている状況ですが、どこからともなく子どもたちが

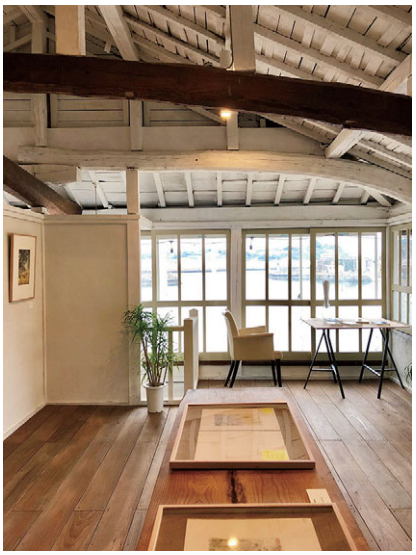
改修前の拠点「こわして！ぬって！」の集合写真

改修後の拠点　芦辺浦の海岸に灯りがつきました

集まってきて、にぎやかな時間が流れています。これからこの場所の中身と運営を考えて充実させていく予定です。学校でも学童でも家庭でもない子どもたちの居場所をつくり、より良い子どもの環境を地域全体で考えるきっかけにしていきたいと思っています。

　そして、その隣にはみなとやゲストハウスがチリトリ自由食堂をつくりました。みんなが気軽に立ち寄り、お茶やコーヒー、食事ができる場所です。島外からの旅人や出張で来た人も気軽に集える場所とすることで様々な人が寄れる場となり日常的な賑わいをつくりだします。以前まちの人が思い思いの時間を過ごしていた海際に、一つの灯りがつきました。この食堂が併設されることでさらに混ざり合う場となり、ここが機能的、社会的、空間的にも芦辺浦の新しいランドマークになっていくことを目指します。

3月6日にオープンしたチリトリ自由食堂


展覧会「陽光～ある島の記憶のかけら」を拠点にて開催、多様なつかい方を模索中

地域を巻き込むワークショップ

拠点をつくるにあたって、まちの人に参加を呼びかけ、ワークショップ「こわして！ぬって！」を開催しました。このワークショップはその名の通り、拠点となる空き家内部を解体（こわして）、落書き（ぬって）をしよう！というものです。参加した子どもたちは「忍者屋敷」とか「ここは食堂にならないよ」などと言っていました。地域の人や子どもたちにこの空き家の現状を見てもらい、この古い家が変わることができることを通して、空き家の可能性を考えるきっかけになればと考えました。外壁の表情が変わることで、まちの人へ「何かが始まる」ということを感じてもらえたのではと思います。真夏日の中での作業でしたがたくさんの人の力でリノベーションができる基礎をつくることができました。子どもたちのエネルギーに驚くと共に、今後の活動への可能性を感じる１日となりました。

「こわして！ぬって！」真剣に解体中

「こわして！ぬって！」真剣に落書き中

２回目のワークショップ「よって！かたって！」は２部構成としました。１部目はこのまちの歴史や物語、大切にしてきたことなどをまちの人が「寄って、かたる（参加する）」場をつくりました。この先に、子どもたちにつないでいくべきものをそれぞれが考えるきっかけになればと思いました。100人を超える人に参加して頂き、年配の方が思い思いの昔話を語り、当時を懐かしみ、若い人たちには新鮮に映った部分もあったと思います。当時のことを知らない私たちでも同じ時間を共にしたような気持ちのいい時間となりました。参加して頂いた人を見て、このまちを本当に好きなのだなと思いましたし、これから目指す未来像がぼんやりながら見えてきた瞬間でした。

わたしたちとして伝えたかったことは、まちの人がこのまちを良いまちだと思えれば、誇りを持てればこのまちは魅力的なまちになっていくということ、そして「まちはまちの人がつくる」ということです。

２部目は芦辺浦の飲食店５店に屋台を出してもらい、美味しい食事とお酒を楽しみながら、まちのこと、これからのことを「酔って、語る」場をつくりました。地元の人に町外、島外からの

人、偶然通りかかった人も酔って語って頂き、大盛況だった屋台も瞬く間に完売となりました。１部で話せなかった人からも、日頃の思いや昔話を聞けたり、たちまちへの質問を受けたりと終わりまで話は尽きませんでした。提灯の灯りの下では子供たちが楽しそうに走りまわり、「昔の本通りみたいに賑やかだった」「またやろう！」といった嬉しい声を聞くことが出来ました。

「よって！かたって！」大盛況だった屋台

住み継ぐこと

この活動を行う中で、単純なことですがまちには人が必要であることを改めて感じています。ここに住んでいる人に、島外の多様な価値観を持っている人が混ざり合うことで、より大きな力になっていくこと（わたしたちの生活も楽しくなっていくことも！）を知りました。この場所で生まれ育ち、今は島外にいる人も、旅の途中でここにふらっと寄った人も信頼できる人がそこにいることが、ここで生きていくきっかけになることを実感しています。一旦住んでみて人と混ざり合うことが、この島に住む一歩になる。そのためには、住まいの準備が必要です。

今年の２月に壱岐市とたちまちは「芦辺浦地区における移住促進ならびに空き家活用推進に関する連携協定」を締結しました。この協定は、移住希望者や空き家の所有者等の相談に対応する窓口の設置や、空き家バンクの登録推進などについて、官民で協力していこうという壱岐では今までになかった試みです。

２月９日　壱岐市との連携協定式

これまでいくつかの空き家の所有者と話をして移住者の住まい等として賃貸、もしくは売買することを手伝ってきました。そこで感じたことは空き家にも記憶があり、住み継ぐとはその記憶を継ぐことでもあるな、ということです。空き家の所有者の中には、受け継がれた記憶を大切にしている人がいます。しかし、中には全く無頓着な人もいます。ガラスが割れ、瓦が落ちたり危険な家屋になっているところもあります。

まちにとっては人が居ることが重要です。所有する側から使用する側へと記憶と共に手渡していく手法を、これから、壱岐市と考えていく必要性を感じています。

もうすぐたちまちの拠点には移住と空き家の相談窓口が設置されることになります。相談に来る方が構えてくるのではなく、ここの日常をそのまま感じてもらえる場をつくっていければと考えています。子どもたち、食堂のお客さん、そして住まいの相談に来る人とさらに、空間と人が混ざり合う場へとなります。そこにはどんな時間と空間が現れてくるのかこれからが楽しみです。

芦辺浦に移住した、上海と壱岐の２拠点居住の家族、空き家をセルフリノベ中

移住者のために準備中の単身者住宅

いいことやわるいこと、これからのこと

この活動を通して難しいと感じることは「どうせ」とか「もうだめ」といった悲観的な声を聞くことです。そこからはアイデアも新しい風景も生まれないと思います。何よりもつまらない。今を圧倒的に肯定するところから始めて、まちはもっと良くなる、世界はもっと良くなるといった、理想主義を子どもたちに受け渡していければと思っています。

嬉しいこともあります。芦辺浦に「何かが変わる」という感覚を少しずつですが共有できていると感じられること、そして「やってみろ」と後ろで構えてくれるまちの人がいること。このまちには、新しいことを受け入れる土台と、変わろうとする意思があります。

わたしたちは決して壱岐のために社会を変えよう、とは思っていません。生活を楽しくするため、よりよい時間をおくれるために動いている、ということに気が付きました。壱岐全体だと見えないこと、考えられないことも自分の隣３軒のことなら見えてくる、考えることが出来るのではないか、そこで発生する小さな物語が、新しい動きを、ひいてはこれからの社会をつくっていくのではと思います。

様々な人が混ざり合うことは、摩擦や衝突もあります。でも、だからこそ多様なコミュニティが形成される、そして人と人のゆるやかなつながりができてくると思います。そうして外の人間を迎えるまちへとなっていくこと。用もないのに顔を出したくなる場が自然に増えて、思いがけず面白いことがおきるまちへ。

ここで働き、生活することを楽しみながら、動き、外に発信していきます。力を抜いて。

たちまちね。